

# Collection Room Winter



北沢映月  
娘  
昭和10（1935）年

コレクションルーム 2025冬期

解説パンフレット

特集「お雛さまと人形の世界～絵画と共に四季をめぐる」

2025年12月19日（金）～2026年3月15日（日）

京都市京セラ美術館 | 本館 南回廊1階

## 特集「お雛さまと人形の世界～絵画と共に四季をめぐる」

コレクションルーム冬期の特集展示では、江戸時代・明和年間（1764～1772年）に京都で創業した人形司「丸平大木人形店」製の人形と、当館所蔵の日本画や書の名品をあわせてご紹介します。「丸平大木人形店」では、五節句をはじめとした季節の行事に合わせて、雛人形や武者人形など様々な人形が作られてきました。丸平の人形は宮中や武家の伝統的なしきたりを踏まえて作られており、その雅やかな姿は宮家や財閥をはじめとする名家にも愛されてきました。現在では、人形店の資料室である「丸平文庫」を通じてその保存と普及が進められています。

今回の展示では、五節句の一つである3月3日の「上巳（じょうし/じょうみ）の節句」、いわゆる「桃の節句」に飾られる様々な雛人形をご紹介します。その一つである「源氏杵御殿雛（げんじわくごてんびな）」【図1】は、屋根がない御殿の形が『源氏物語絵巻』に見られる「吹抜屋台（ふきぬきやたい）」と呼ばれる、屋根を取り払った室内を見せる描き方と似ていることからこのように呼ばれています。また、「天児（あまがつ）」や「這子（ほう

こ）」と呼ばれる白い布等で作られた簡素な人形は、雛人形の最初期の姿である「立雛（たてびな）」【図2】の原形になったといわれています。

特集展示では、人形とともに、四季折々の景物を描いた当館所蔵作品もご覧いただけます。北沢映月の《娘》（表紙）に描かれているのは、よそゆきの着物に身を包み、上巳の節句を祝う少女たちの姿です。彼女らの左側には、活けられた桃の花や蒔絵で彩られた漆の御膳、犬宮（いぬばこ）、人形が置かれています。年少の娘が着ている、紅白の牡丹や小花が散らされた華やかな着物に対し、年長の娘の落ち着いた矢絰文の着物は、二人の年の差をさりげなく示しています。師である土田麦僊から学んだ細やかで無駄のない描線が印象的な本作は、第1回京都市展の初入選作品です。



【図1】  
四世大木平藏製  
源氏杵御殿雛一式  
大正期  
丸平文庫蔵



【図2】  
五世大木平藏製  
古代立雛一式  
昭和初期  
丸平文庫蔵

## 交趾焼の愉しみ —赤沢露石の器

交趾焼（こうちやき）とは、主に中国南部およびベトナムで焼かれた、器面全体に色釉がかけられた陶器です。中国・唐代の三彩の技法を汲み、黄・緑・紫・青・赤など鮮やかな色を特徴とします。交趾焼が日本に伝来したのは12世紀頃であるとされ、日本でもその技法が取り入れられるようになります。桃山時代には、茶の湯の世界で人気を博しました。交趾焼では、素地の上に粘土や釉薬を絞り出して細やかな文様を描き出し、その線に沿って釉薬を色分けする「いっちゃん」の技法が用いられています。

名跡（みょうせき）・赤沢露石（あかざろせき）は、明治期以降、代々京都で交趾焼の技法を受け継いできました。時を超えて磨き上げられてきた、鮮やかで緻密な焼き物の世界をお楽しみください。



（四代）赤沢露石  
交趾線文様花瓶  
昭和45-54(1970-79)年頃

## 小清水漸

小清水漸（こしみずすすむ）は1944（昭和19）年愛媛県に生まれ、多摩美術大学彫刻科で学び、その後「もの派」と総称される、物質と人の行為、そして空間との関わりから表現を立ち上げる動向の中心的作家として知られるようになります。1970（昭和45）年には「第10回日本国際美術展『人間と物質』」、翌1971（昭和46）年には「第7回パリ青年ビエンナーレ」に参加し、帰国後に関西へ居を移してからは、京都市立芸術大学で長年教鞭を執り、多くの後進を育てました。

展示では、1976（昭和51）年に当館で開催された京都ビエンナーレに出品された《作業台》（再制作）や《クレパス》をはじめ、小清水にとって重要な転換点となった《垂線》、現在も継続して取り組む《表面から表面へ》、そして《Relief' 78》など、初期から80年代にかけての代表作を紹介します。人間と物質が対峙する時、そこにはどのような関わりが生まれるのでしょうか。目の前にある作品の背後に意味や事情を読み解こうとするのではなく、物質そのものが示す存在の仕方、そしてその表面をなぞるようにそのまま向き合ってみること。そこから何が見えてきて、何が感じ取れるのか—その問いこそが、半世紀以上にわたって続く小清水の探究の核心にあるのです。



小清水漸  
作業台  
昭和51(1976)年(平成9(1997)年再制作)

## 線の魅力、形の不思議

線を引くことは絵を描く第一歩です。たとえば日本画には、彩色の前に墨で絵の輪郭線を引く「骨描（こつがき）」と呼ばれる工程や、それをもとに原寸大の下絵をつくって本画の構成を決める過程があります。下絵に残る描き直しの筆跡からは、細かな調整や全体のバランスに細心の注意が払われていることが分かります。このように日本画において、線は極めて重要な役割を果たしています。

また、りんごは丸、ワインの瓶は円筒形といったように、絵は対象の線や形を捉えて構図を考え、組み合わせながら描いていきます。渡欧先でキュビズムの画家アンドレ・ロートに学んだ黒田重太郎（くろだじゅうたろう）、図式を絵画化した北脇昇（きたわきのぼる）、民俗学に基づくモチーフを幾何学的形態へと昇華した小牧源太郎（こまきげんたろう）といった洋画家は、絵の基本となる形そのものを探究した画家たちといえるでしょう。

木下佳通代（きのしたかずよ）の版画作品では、線や図形が写真と実線でそれぞれ写し取られています。これによって同じ線や形でも実際に見えているものと私たちの認識の間にはず・れ・が生じてしまうことを視覚的に示しています。

本章では、日本画の技法から洋画家や現代の作家たちの試みに至るまで、あらゆる角度から線の魅力や形の不思議に迫ります。



小牧源太郎  
道祖神図  
昭和26(1951)年

## アール・デコと京都の工芸

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、機械産業や科学技術が進歩する中、ヨーロッパでは新しい都市生活にふさわしい装飾様式が求められるようになり、産業と芸術の融合が進みました。1925年にパリで開催された「現代産業装飾芸術国際博覧会（アール・デコ博覧会）」は、こうした時代の要請に応えたものでした。同博覧会では、機械産業の発展と呼応するかのように幾何学的な装飾が人気を博しました。

アール・デコ博覧会でみられた幾何学的な様式は日本にも浸透し、同博覧会で審査員を務めた津田信夫を中心に、東京では1926（大正15）年に工芸団体「无型（むけい）」が結成され、同様式を取り入れます。

京都でも、1920～1930年代にかけて、新進気鋭の作家たちによって革新的な工芸作品が生み出されました。1935（昭和10）年には、若手や中堅の工芸家23名によって、分野を超えた総合的工芸団体「蒼潤社（そうじゅんしゃ）」が結成されます。今回の展示では、「蒼潤社」の結成時のメンバーである陶芸の清水正太郎（六代清水六兵衛）・伊東翠壺（いとうすいこ）・米澤蘇峰（よねざわそほう）、染織の皆川月華（みながわげっか）・岸本景春（きしもとけいしゅん）、漆芸の堂本漆軒（どうもとしっけん）らの作品を紹介するほか、同時代のモダンな気運を感じさせる京都の工芸品をご覧ください。



米澤蘇峰  
銀彩花瓶  
昭和5-14(1930-1939)年